

休み時間のトム

それは、ある晴れた春の日でした。ネロはあの日から、休み時間にもよくトムのところへ来るようになりました。ペンをなくした夜はこっぴどく怒られたようですが、それはそれとネロは元気でした。

ちなみに今日のトムのブローチはマメナシの花です。昨日の帰り道、道端に落ちてたのを見つけてブローチにくっつけてきたのです。ちょっとしおれてますが、とても愛らしいブローチです。トムの背中には春がくっついていました。

お昼休みは、トムは食べるのに時間がかかってあそべないので、ネロはトムが食べている席のとなりに椅子を持ってきて、食べるトムのじゃまをなるべくしないように今日の出来ごとを話したり、消しゴムをペンで打って、机を球場に見立てたミニ野球ゲームなんかをして、一人であそびました。

運よくトムが休み時間内で食べ終わると、片付けるのを手伝ってあげて、二人であそびました。たいていはトムがネロの話を聞いて、トムがたまにあいづちを打っていました。それでもネロはトムと話すと、教室がいつもとちがって見えて好きだったのです。トムはいつも、楽しそうにぼんやりネロの話を聞いていました。ミニ野球ゲームはトムはぼんやりし過ぎて、バッターには向かなかったので、いつもピッチャーでした。いつ投げてくるか分からないので打ちづらく、かなりの名ピッチャーでした。

そんなふうにあそんでいる教室の窓ぎわにもう一人、ランチをなかなか食べきれない子がいました。サラです。サラは細身でとてもおとなしい子です。いつもトムとサラがランチをなかなか食べられず、お昼休みも残って食べていましたが、トムはぼんやりしていますし、サラは少し気の弱いところがあったので、これまでどちらからもしゃべりかけることはなかったのです。

ところが最近、ネロがランチ後の教室によくいるようになりました。ネロはもともとクラスの中でもおしゃべりな方でした。ですので、以前はみんながお昼休みに校庭にあそびに行くので、しずまり返っていた教室もにぎやかになりました。とは言っても、たいていはネロが一人で延々とおしゃべりしているだけなんですけどね。

サラが今日もゆっくりランチを食べていると、ネロがペン打った消しゴムがサラの方に飛んできました。サラはそれを拾い上げてネロに差し出しました。「やあ、ありがとうサラ」とネロはお礼を言いました。サラは元気よく言われたので、ドギマギしてしまいました。前までは、ネロはお昼休みは外であそんでいたのですが、お昼休みの教室にいつもサラがいることも知りませんでし

た。なので、あまりネロとサラはしゃべったことがなかったのです。普段から大人しく、いつも一人でいることが多いのを知っていたネロは、消しゴムを取ってもらったついでに言ってみました。

「サラ、ランチ食べ終わったら一緒にあそぼうよ」

サラはとつぜんのものでびっくりしてしまいました。トムはぼんやり二人をながめています。ネロは返事を待たずに言葉は続けます。「食べ終わったら教えてね」そう言って、「あ、あの、」ネロはサラの返答は待たずに、トムの方の机に戻り、ペンと消しゴム野球を再開しました。

サラは、もう少し残ったランチにゆっくり手を伸ばしながら考えていました。そして、最後のおかずを食べ終わった頃、一つの決心をして、トムとネロのところへやってきました。「あ、食べ終わった？一緒にあそぼう」とネロが言うサラは言いました。

「あ、あの、食べ終わったよ。あ、あの、一緒にあそばないとだめ？」

これには、ネロがびっくりしてしまいました。きらわれていると思ったのです。ちょっとしゅんとしてネロは言いました。「ごめんね、サラは一人のときが多いから、もしかしたら誰かとあそびたいのかと思って声をかけたんだよ」

サラはハツとして言いました。

「あ、ごめんなさい。別にトムやネロがきらいとかそう言うことじゃないの。ただ、」

ネロはそれを聞いて、きらわれていないことが分かり、少し安心しました。トムは相変わらずぼんやりしています。ネロは「ただ？」と次の言葉をうながしました。

サラはしばらくだまってから、ゆっくりと言いました。

「友だちっていないとダメなのかな？」

ネロは友だちはぜったいにいた方が、むしろたくさんいた方が良いと思うのが当たり前だと思っていましたので、あぜんとしました。そして、すぐにはなんの言葉も出てきませんでした。

「えーと、そうだなあ。。やっぱり友だちはいた方が良いと思うよ」

ネロは自分でもよく分からないまま答えました。サラは「なんで？」と言いました。ネロはすっかり困ってしまいました。当たり前前のことが当たり前じゃないよって言われたようなものだったからです。サラは少しゆうぎを出すように言いました。

「わたし友だちって言える人がいないの。だけど、これまで友だちがいなくても勉強は出来るし、一人であそぶこともできるのよ。だから、友だちがいなくて心配されたりするのは、とても変だなと思うの」

ネロはすっかり困ってしまいましたし、たしかにそうだなとも思いました。

友だちってなんでしょうか？ サラ自身も友だちが必要ないと思っているわけではありません。なぜ？ 友だちを作らないといけないのか分からなかったのです。

長いことちんもくがありました。三人が誰もしゃべらず、校庭であそぶみんなの声が聞こえています。2分はちんもくが続いたでしょうか？ あそんでいる時の2分はいつしゅんで過ぎますが、何をしたら良いか分からない時の2分は果てしなく長く感じるものです。重いちんもくも2分が過ぎようと言うころ、不意に声が聞こえました。

「マメナシの花が今とってもきれいだよ。通学路からは少し外れるけれど、マメナシの木がたくさんある、とてもすてきなところを知っているよ」

トムでした。いきなり花の話が出たので、ネ口はとまどいましたが、これはちんもくをやぶるチャンスだとトムに続きます。

「おー、それはいいね。どうだい？よかったら今日の帰り3人でそこへ行ってみないかい？」

サラは返事に困りましたが、じつは花が大好きだったので、マメナシの花を見に行きたくなりました。

もじもじしているサラを見てネ口は続けました。

「サラの好きなようにして。でも、満開のマメナシはきつときれいだよ」

トムもマメナシの花が満開なのをそうぞうして、ニコニコしていました。

そして放課後、ネ口はおそろおそろ、サラにマメナシを見に行くか聞きました。サラは恥ずかしそうに「うん」と言いました。ネ口の顔はパツと明るくなりました。トムはその後ろで楽しそうにしました。